



#5

「表現未満、」 と福祉

支援計画書様式のリサーチ

毎年様々なアートプロジェクトを行っているレッツだが、活動の核となっているのは、障害福祉施設「アルス・ノヴァ」（生活介護・就労継続支援B型・放課後等デイサービス・ヘルパー事業）である。「障害者支援」の現場であると同時に、どんな表現も取るに足りないものとせず尊重する「表現未満、」の場でもある。いっぽう、障害者総合支援法で必要とされている書類では「より良い結果」に向けた「計画」を作ることが求められる。障害者支援に携わるわたしたちは、どうしたら「表現未満、」の目線を福祉の世界で言語化できるのだろうか。そんな悩みから、今年は「個別支援計画」の扱い方について他の施設に伺ってリサーチするとともに、福祉施設とアートの狭間についてキュレーターの青木彬さんにお話を聞いた。

支援計画書様式のリサーチ 年間スケジュール

日付	できごと
12月11日～13日	青木彬さん滞在、ゲストトーク
12月22日	たんぼぼの家(奈良)
1月16日	やまなみ工房(滋賀)
1月19日	ニコちゃんの会、工房まる(福岡)
1月24日	ハーモニー(東京)
2月13日	studio COOCA(神奈川)
3月1日	リベルテ、犀の角(長野)









「表現未満、」と 「支援計画」の狭間で



アルス・ノヴァでは日々、「支援」をしている。

知的障害や精神障害のある人たちとスタッフが共に過ごし、お互いが機嫌のよい状態にいる場を作っている。

曾布川さんは、亮賀さんにマイクを渡し、ギターとの終わりなき即興演奏を楽しんでいる。

亮介さんは、燎さんがくつろぐスペースで、レーシングゲームをスクリーンに映し出して、街を走り回る映像を部屋いっぱいにして流している。「今日はドライブに行けないから」と亮介さんは言う。

いつも一風変わったクリエイティビティを発揮する尾張さんは、ある日Tちゃんとかわいいパンツづくりをしていた。パンツにいろいろな飾りをつけるアクティビティに、飽きっぽいはずのTちゃんが集中していた。

カナタさんが日課にしている買い物に今日付き合っているのは佐藤さんだ。コーラを買うためレジにいくと「今日は1本なのね」とお店の人が声をかけてくれた。

私の前で床に寝ているのはミツルさんだ。いびきをかいて寝ている。服がめくれてお腹が冷えそうなので、お腹にタオルを挟んでみた。

障害者総合支援法下では、障害のある人を支援するときには、「個別支援計画書」をもとに支援が行われなければならないことになっている。ふだんのんびりした日常

を過ごしている私たちでも、総合支援法のもとで事業を行っているので、まがりなりにも、一人ひとりの「個別支援計画書」を作成している。

「個別支援計画書」に記載される内容は「名前」「本人・家族の意向」「長期目標」「短期目標」「達成時期」「具体的な支援方針」「他機関・地域との連携」であると研修で教わるし、全国どこでもほぼ同じである。

レッツが運営する障害福祉施設アルス・ノヴァの個別支援計画はこれまで10年以上、市の指導のもと、きちんとこうした内容の個別支援計画を作ってきた。計画作成の時期になると、担当者はこれまで半年分の記録を見直し、「渡し作業」と私たちが呼ぶ、エッセンスを取り出す作業を行う。それをもとに新たな計画を作ったり、それまでの計画の継続を決めたりする。

ところが、最終的に個別支援計画ができると、なぜかそれは「つまらない」ものになってしまう。どういうわけか、計画がまとまると同時に「血の通った」感覚が失われてしまう。「渡し作業」を行う過程では、日々の支援では気づかなかった大きな変化への気づきや学びがあるにもかかわらず、個別支援計画に書かれる項目や簡潔なことばによって空虚になってしまい、支援にも生かされないただの紙切れになってしまうのだ。

アルス・ノヴァでは、以前から主に私が

このことにわだかまりを感じてきていて、折にふれてこうした議論をしてきたが、そのたびに結局は「法定書類だから最低限書いておく」というスタンスに落ち着き、簡潔な個別支援計画を作成してきた。

今年も例年どおり議論をしているのだが、例年と違って今年は、レッツで受託した文化庁の事業としてスタッフ全員で本腰を入れて取り組むことができた。「その人のありのままを全肯定する」と公言し、「表現未満、」を大切にしているはずのアルス・ノヴァで、「個別支援計画」の一般的な書式を無批判に使っていいのか。私たちが必要としている記録の方法として、もっとほかのやり方はないものなのか。もし良い書式が開発できるのなら、それを他の福祉施設に広げていくことができるのではないか――。

まず、一般的な書式で気になる項目を挙げてみたい。

最初に書かれるのは「本人や家族の意向」。ことばでのコミュニケーションがない方の場合、本人の意思が確認できないなかで「本人の意向」をどう記すのか。実はそのことについては、アルス・ノヴァでは一定の見解がすでにあるし、国としても令和6年度の法改正で注意深く行うようにと追記されるので、それほど大きな問題ではない。しかし、そもそも「意向」が誰にでも必ずあるものなのか、とか、さまざまな時間軸で星の数ほど発生する「意向」（例えば「親子丼が食べたい」「今日は静かな場所にいたい」）をどう半年の計画にまとめられるのか、など気になるポイントはある。抽象度を上げて「したいことをして、行きた

いところに行きたい」ぐらいしか書けないのではないか。しかしそう書くと計画作成研修では「もっと具体的に」と赤を入れられ、市の指導でも指摘されてしまう。具体的にしようとする、わたしたちはある期間にとられたアセスメントや日常の記録から、あるかもしれない「意向」を「想像」して「創造」するしかない。

そもそも「個別支援」であることにも違和感がある。利用者は、さまざまな特性をもったスタッフや家族、他の利用者や地域の人々の相互関係のなかにある。その人がどうありたいかは、決して固定化されているものではなく、周りの人の行動や環境、スタッフの投げかけ方によって大きく変わり、常に関係性のなかで動くダイナミズムの中にある。それを「個」で切り取ってしまうのは、ダイナミズムの渦中で常に動きを変化させている支援の実態にそぐわないのではないか。

そして最も悩ましいのが「目標」である。「ありのままの存在を全面的に肯定する」と公言している私たちが、なぜ利用者をステップアップをさせなければならないのか。人間だれもが「今よりもっと良く」ならなければならない、という呪縛から抜けることはできないのか。「達成時期」として長期目標と短期目標が示され、その時々で他人に達成度をチェックされるのも、自分だったらごめんだ。そもそも、法律に立ち返ると「生活介護の目標」とされているものが、一般的な書式や記載例では「本人の目標」にすりかわってしまっている。

もちろん、計画的な支援が必要な理由もわかる。パニックを起こして辛そうだったり、家族が疲弊しているというのに、泰然

と「ありのまま」なんて言っていたら怒り出すだろう。しかし、そうでない場合であっても「目標」を設定しなければならないのはどうなのか。まるで、「仕事してまず！」と支援者が主張するための書式のようなではないか。

そんな悩みを胸に、とにかく今年は、他の施設ではこうした問題についてどう考えているのかを聞きに行くことにした。東京の「ハーモニー」や、滋賀県の「やまなみ工房」、福岡県の「工房まる」や「ニコちゃんの家」、神奈川県「studio COOCA」、奈良県の「たんぼぼの家」など、一般的な福祉施設というよりは、どちらかというレッツのようにアート活動を通して一人ひとりの障害者に向き合って、社会に開いたり問いかけてたりしている施設ばかりである。スタッフがグループに分かれてそれぞれの施設にお邪魔して、個人情報保護の範囲内で書式を見せていただき、先に紹介したような様々な疑問をぶつけさせていただいた。

さて、レッツのスタッフが悩みを相談すると、共感する施設もあれば、全く考えたこともなかったという施設もあった。個別支援計画については、どの施設も共通して一般的な項目が書かれた書式が使われていた。

ただし、その向き合い方はさまざまだった。同じ悩みを抱えているが、保護者にとっては達成と評価があるほうが喜ばれるので、計画の評価時には写真をふんだんに載せるという施設。とても丁寧を作りこむが、計画の見直しを最低限にして継続して使用している施設。「利用者が楽しそうな

らよし、作品が記録そのもの」というスタンスで、支援計画は最低限とする施設。いっぽう、計画は最低限であっても、利用者同士のミーティングでは必ず記録を取る施設。支援計画を本人の言葉で逐語的に記し、意思がわからない方の場合は「聞き取りが難しかった」等の記載で、書類そのものの解体が起こっている施設。計画作成を「考えるきっかけ」として捉え、割り切ってやることにより守れるものもあると考える施設――。

自分たちが考える支援を担保するために、どんな書式であれ作成する責任を負う。それを丁寧につくったり、考えるきっかけとして捉えたり、できるだけ簡潔な計画で済ませるなどの違いはあったものの、そうした基本的な姿勢は共通していたように思う。

リサーチ報告のあと、レッツではどうしていくべきか、正社員全員でさまざまな意見が交換された。やはりこれまで通り、割り切って最低限の個別支援計画を作っている方がいいという意見もあるいっぽうで、それでは働いている人が「これをやってあげばOK」と思考停止してしまったり、計画に囚われたりしないかという声もあった。

そういえば、レッツが「かたりのヴァ（哲学カフェ）」でお世話になっている哲学活動家の西川勝さんにあるスタッフがこの件について相談したとき、こんな話をされたという。「福祉サービスは責任の所在を明らかにしなければならないから、支援計画は避けては通れないだろうが、計画と生活は相性が悪いものだ。計画は静的であり、生活は動的。計画することによって先に考えてしまう『先知恵』が起こるが、大事な

のは『後知恵』。やってみてどうだったかということが大事だ」

スタッフの意見にも「先知恵」に懐疑的なものがあった。少なくとも「計画」はクソだ、とか、作成した後誰も見ない計画を立てるよりは、普段の会議を記録するほうがよっぽど有意義ではないか？とか。これまで文化事業と福祉を切り分けて考えてきたが、文化事業では居場所をずっとやってきたし、一人ひとりが認められる体験をアートを通してやってきたから、それを支援計画にすればいいのかもしれないとか、そもそも「個別」だからだめなのだ、一人の人が伸びることよりも、関係性や居場所を見つけられたとか、文章でなくても表現できたらいいのかもしれない等々――。

「少なくとも現状の個別支援計画を変えるのは簡単ではないから、かつて私たちが『支援会議』を外部に開いて『しえんかいぎ』としたように、『こべつしえんけいかく』を作るのがいいのではないか」と一人が言った。そうするのが現実的かもしれない。

改めて、なぜこんなにリサーチしたり話し合ってきたのかおさらいする。現行の個別支援計画では、常に何かの目標に向かわなければならないなど、様々な疑問点があり、ふだん「表現未満、」を大事にし「その人を全面的に肯定する」としている私たちはそれを何とかならないかと思っている。

いっぽうで、自分たちが支援を深めるためのツールとして、自分たちにとって必要な機能は何なのかを明らかにする必要がある。それを踏まえて新しい個別支援計画書という形で作ることができれば、他の福祉施設にも広げることができるかもしれない

し、福祉制度に提言できる形になるかもしれない。

今年は他の福祉施設での支援のあり方や、個別支援計画についてリサーチさせていたでいて、スタッフ間での意見交換をすることができた。

次の展開はどうだろう。スタッフからはスタッフ会議での議事録そのものを支援計画とするのはどうだろう、とか、『ピアレビュー』という手法がいいかもしれないなどの声が上がっている。いろんなジャンルの人たちで構成される、「事務と法と現場を考えるネットワーク」のようなものを作って考えていくのはどうだろうか、という提案もある。

もしかしたら、「しえんかいぎ」のように、今後はアルス・ノヴァの中だけでなく、さまざまな人を交えて話し合っていくのが良いのかもしれない。なぜなら、彼らは「個」ではなく、社会の中の一員だからだ。

最後に「個別支援計画」を規定する障害者総合支援法第17条第5項を転載する。知的障害のある人たちが、冒頭に描いたような、自分のペースでスタッフとのんびり過ごすアルス・ノヴァの日常風景を思い浮かべながら読んでほしい。

サービス管理責任者は、アセスメント及び支援内容の検討結果に基づき、利用者及びその家族の生活に対する意向、総合的な支援の方針、生活全般の質を向上させるための課題、生活介護の目標及びその達成時期、生活介護を提供する上での留意事項等

を記載した生活介護計画の原案を作成しなければならない。この場合において、当該生活介護事業所が提供する生活介護以外の保健医療サービス又はその他の福祉サービス等との連携も含めて生活介護計画の原案に位置付けるよう努めなければならない。

(※生活介護の当該条項は療養介護の準用のため「療養介護」を「生活介護」に置き換えて記載)

夏目はるな



「表現未満、」を軸とした 支援計画と支援の考察

障害福祉施設では利用する障害者の支援計画を作成することが義務付けられている。本人や家族、支援者にヒアリングをし、モニタリングや支援会議を行いながら計画が作られている。重度の知的障害のある人たちの計画は主に、家族や支援者のモニタリングが主導になってつくられる場合が多い。それは本人たちがやりたいことや意志やビジョンを明確に伝えることが難しいからだ。

支援計画は、計画という言葉に象徴されるように成果が求められる。だから当たり前のように「なにかができるようになる」と計画してしまいがちである。しかし現実に重度の知的障害者の場合この判断も非常に難しい。

2023年度、この支援計画を考える（リサーチ）事業を行った。彼らの存在そのものを「表現」ととらえる「表現未満、」を推進しているレッツにおいて、支援計画を根本から見直すために、17名のスタッフが手分けして全国の施設にヒアリングを行った。その報告と検討を行う会議が2月24日に行われた。

そうした中で利用者自身をレッツが行っている事業（表現の可能性や多様性を伝える文化事業）の主体として捉えていくことができるのではないかというアイデアが生まれた。

彼ら自身が変化していくことを促すのではなく、彼らの存在自体がどう周辺にインパクトを与えているのか。それをどうとら

えたらいいか。そこから見えてくる彼らの姿を支援計画に現すことはできないのか……。

重度知的障害者の社会的役割は、重度知的障害者を知らない多くの人々（マジョリティ）に「多様性」を生き生きとリアルに伝えられるということだと考えている。そしてマジョリティの社会が彼らをどのように受け入れていくかは、その社会の文化や倫理や哲学の試金石でもある。彼らの社会的な存在をどうとらえるかは、実は彼らの問題というよりも社会の課題である。そうした視点で計画をつくるとしたらどうなるのだろうか。

しかし一方で、計画自体に対する疑いもある。（西川先生のことのように。）支援計画そのものが意味をなさないのではないのか。そうであるのであれば、支援計画はあくまでも「書類」として処理していけばいいのかもしれない。

しかし、職員が多くの時間を割いて制作する書類が意味をなさないよりも、そこにオリジナルの考えを盛り込んでいく行為も必要だと思う。その時に「当事者中心主義」的な作り方ではなく、社会や環境（周辺や状況）の中で、彼らの行為や営み、活動がどうとらえられるのか。彼らの存在がどう影響を与えているのか。何を工夫すると彼らは自身の行為やこだわりを変容することなく過ごすことができるのか。それらをどのように計画書としてつくるのか。

この作業は、今まで別のものとして処理していた文化事業と障害福祉事業がほぼ一体となって、利用者にとどのような変容を生むのか。または守るのか。しばらく考えてみようと思う。

久保田翠





#5 「表現未満、」と福祉

視察レポート

column

支援計画書はその裏側に広がる実際の支援のようすや施設の空気感とどのように関係しているのだろうか。スタッフが7チームに別れて全国各地の施設を訪れ、個人情報保護の範囲内で書類や支援の様子を見せていただいたり、土地の雰囲気などを体感してきたので、それぞれのレポートを紹介する。今回お話をきかせていただいた施設は、やまなみ工房（滋賀／p.168）、たんぼぼの家（奈良／p.171）、studio COOCA（神奈川／p.172）、ニコちゃん家（福岡／p.174）、工房まる（福岡／p.176）、リベルテ（長野／p.178）、ハーモニー（東京／p.180）の7施設。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。



やまなみ工房

人に安心感を与えるやまなみ流ホスピタリティ

念願のやまなみ工房見学が実現した。いままでに何度かトライしながら行くことができなかったやまなみ工房。それは時々で山下さんにお会いしてお話して、分かったつもりになっていたのだと思う。また、送られてくる作品集やDMのカッコよさと多様さとまじめさは、レッツでは決して踏み込めない領域で、むしろ私にとって「聖域」になっていたように思う。

そしてついに2024年1月、聖域に突入した。まずおしゃれなカフェに通されて、体によさそうな、おいしいお食事をいただく。食器一つとっても厳選されていて、こだわっている姿を肌で感じる。レッツでの食事風景が目につく。言葉は悪いが「味噌もくそも一緒」みたいな食事風景の連続のレッツ。決してレッツでは飲食はやるまいと思っている（衛生面がなっていないから）。重度の知的障害者の営みと、ここにある世界はともかけ離れているが、しかし、きっとこれは、山下さんたちが編み出した、障害者であってもこんなにおしゃれな世界を作ることができるんですよ！という声明であり、来た人たちに余計な心配や不安をあたえないためのホスピタリティなのだろう。

やまなみ工房が大切にしていること

作品は、すごかった。その質、量、バラエティは圧巻以外のことばがない。間違いなく日本のトップ。世界でも類を見ないだろう。その根幹はやはり重度の知的障害者がいることだと思う。重い障害のある人たちをケアしているからこそ生まれる重み。生きること、生活すること、活動することがまさに一直線の現場の中から生まれる制作。それに本当に力があると感じる。いろいろな制作を行っている障害者施設の現場を見せていただくが、作れる人、描ける人がやっていたらいいのだといったぬるさや、それを職業化してしまっている姿に言い知れぬ陳腐さを覚える。結局は「作業」にしてしまう福祉の暴力。だったら一日中散歩している、寝ている方が彼らにとっていいのではないか。本人たちの描きたい、つくりたい衝動なんて時々にはか起こらない。それをルーティン化することへの心地悪さをいつも感じる。しかしやまなみ工房は、重い人のケアと表現が一体になっている。生活の延長線上に表現活動があることが見える。それは人として得難いもの、忘れてはいけないものを大切に持ち続けながらの施設運営があり、表現がある。

そしてそれを、80人をほぼ均等な熱量で説明するスタッフの執念。い

い作品、売れる作品、注目される作品を生む人とそうでない人を分けることなく、みんな同じ情熱と力を込めてケアし、大切に思っている。その表明なのだと思う。それは、やまなみ工房が何を一番大切にしているかの表明でもあったのだと思う。

そして、だんだんと奥にいる人たちの状況が明らかになっていく順番。最後の部屋は、レッツにとっては安心できる人たち（私たちの現場にいる障害のある人たちに近い）その人たちがわー、キャー、やっている状況があってそれをスタッフが追いかけている姿には、安心感を覚える。そしてこうした状況でもほぼ全員が制作に携わっているというのはやはりすごいことだ。

制作をするという環境

場を設定するとき、「〇〇をやる場所」というのはある意味、場所をわかりやすくするし、そこでの振る舞い方を整理してくれる。それはその場所にやすくなるともいえる。なのにレッツは「何をしてもいい」と言いきってしまうのは、あえて無法地帯をつくり出しているともいえる。それは大多数の人に居心地がいいわけではなく、ある一定の人しか寄せ付けない。だから「秘境」と自ら宣言してしまうように、ものすごく変な場所をつくり出しているということを改めて感じている。

やまなみ工房は「作品づくり」というのが全員にあり、毎日制作しないとしても、それが一つの枠組みになっている。だからと言ってそこからはみ出した行為や活動は山ほどあるようだし、それも認めている。だからこそこの枠は、本人たち、家族、働くスタッフにとってもやはりわかりやすさや安心につながっていると感じる。

そして人は人に影響されて人生をつくるものだと思う。どんなに障害が重くても、隣でやっている行為に少なからず影響を受けているのだろう。最初の建物の人たちが非常に緻密な作品をつくり出している様子は、いろいろな意味で影響し合っているのだろうなと感じた。そして最後の部屋のにぎやかな様子から、やはり影響しながら皆が楽しく生きているのだと感じた。

地域性

支援計画作成において、やまなみ工房では本人と同じぐらい家族のニーズや納得を重視している姿に少し違和感を覚えた。しかし説明を聞いていくうちに、やはり地域性というものが色濃く反映されることがよくわかった。それほど人口が多くない市で、昔からの付き合いもちゃんとあって、

コミュニティをそれぞれが持っていて、その中で障害のある人をケアするというのは、本人とともに家族も健やかに生きていくことが求められているのだと分かった。それだけ本人たちが家族に大切にされ、しっかりしたコミュニティもある地域なのだろう。

一方でレッツのある浜松は、典型的な地方都市。政令市でもある。ここは独立心も強いし、競争も激しい。そうした中でそこから零れ落ちてしまった人たちは孤立しがちである。何をやっても怒られない、干渉されない分、責任はすべて個人（家族）にやってくる。そうした中で、特徴のはっきりした障害者や生きづらさを抱えている人たちが寄り集まって、家族や地縁によらない、一からコミュニティをつくり出そうとしている。その中心に障害者を据えた時にどんなコミュニティになるのかといった実験（失敗するかもしれない）を行い始めた。こんなことを考えながら障害者施設を運営しているというのはかなりクレイジーだとつくづく自覚した。

愛の表現

前から山下さんの話を聞くたびに「障害者への愛がある人だなあ」と感じていた。そして今回、スタッフの皆さんにも浸透し、これがやまなみイズムなのだと感じた。愛は、その人へのリスペクトでもある。守るばかりではなく、ともに生きる。それがやまなみ工房に息づいていることが、いい作品をたくさん輩出している根幹だろうし、私にとって一番信用できることだった。日本にやまなみ工房があってくれて本当に良かった。

スポンジのような団体

やまなみ工房はスポンジのような団体だと思う。実直にまじめに日々を丁寧に生き、作品をつくり続けている。そこに多くの人たちがやってきて、その人たちがメディアとなり外に伝えている。レッツだったらこう見てほしい、こうやってほしいとついつい注文を付けてしまうだろうが、そうではなく、まな板の鯉のごとく、どう料理されるかを楽しんでいる。ここに真理があると感じる。相手の作法を受け入れるというのはやさしいようで難しい。しかしそのほうが確実に世界は広がっていくのだろう。そして無色透明であればあるほど、その広がりは大いだろう。そこがまさにやまなみ工房の妙なのである。そして本当の福祉ってこういうことをいうのではないかと感じた。

レッツはレッツのままで突き進もう

やまなみ工房とレッツは手法においてある意味真逆にある。レッツは無色透明どころか、自己主張の塊のような団体。しかしそうでありながらも、本物の福祉を追求している。それは既存の障害者を抱え込んだり、既存の価値観を押し付けずに、どう彼らと社会が幸せになれるかを考えている。それが作業をしない、作品も作らない、とにかく外に出る、社会とかかわる、いろいろな人を呼び込む、みたいなおかしな活動につながっている。そしてここにいるスタッフも障害者の幸せとともに自分の幸せの実現をテーマにしている。みんな、主張や個性、好みも強いし、ばらばらで統制も取れない（とらない）。時にこれが悩みでもあるが、今回の見学を通して、レッツはレッツなりにやっていくしかないと思った。

インサイドな活動があるからアウトサイドがある。やまなみ工房はまさにインサイドな団体だ。そして日本の福祉のスタンダードになってほしい。「人を愛する」「大切にする」それが福祉の基本であるべきだ。真剣に愛した結果が作品につながっている。この道は本当に正しい。

やまなみ工房ありがとう。レッツはアウトサイドとして頑張ります。これからも同志としてお付き合いください。

久保田翠

.....



たんぼぼの家

若い頃、わたしは一生懸命に女性を口説いた。なぜそんなに一生懸命だったのかというと、その動機の大きな一つに、その人の「部屋を見たい」ということがあった。一度部屋を見てしまうと満足してしまい、そのまま何もせずに帰るといこともしばしば。わたしは、なぜそんなに「部屋を見たい」と思っていたのか。

それぞれの人が住んでいる部屋では、その「人」と「物」の間に結ばれている特殊な関係を見ることができる。その関係は一般的な「人」と「物」の関係ではない。置き物一つ取ってみても、そこにはそこに住む人との特別な意味が入り込んでいる。どれ一つ取っても、そこに住む人との間に特殊な関係のない「物」はない。そこにある「物」はどこにでもある一般的なものではないのだ。そういった「物」で満ちた部屋の中は、あたかも外面化された人間の内奥のようだ。

他事業所の見学に行くことには、どこかそれと共通する感覚がある。たんぼぼの家にお邪魔させてもらうときに、わたしが期待していたことは

まさにそのことだったし、いざ現場に着いたときに感じた驚きも、そのことに起因している。わたしが驚いたのは、あらゆる人、あらゆる現場において異なっているはずのその内奥のあり方が、どことなくレッツのそれに似ていたことだった。机、椅子、本棚、並べられている本、コップ、トイレ、現場スタッフのたち振る舞い…などなど。そこには真正な意味で「同じ物」があるように感じられた。レッツの運営するアルス・ノヴァがたんぼぼの家に大きな影響を受けて始まったことは知っていたが、その影響関係はわたしが思っていたよりも深いものとして、そのとき感じられたのだ。

わたしは最後に、利用者さんの一人の住む部屋も見せてもらった。その部屋には、わたしの期待するまさにその人の内奥そのものが反映されていた。そして、それは彼の人物像そのものといった部屋だった。そこに見栄や虚飾がなかったという意味ではない。見栄や虚飾も含めてその人そのものという感じがしたのだ。きっと彼が見学者に部屋を見せるのは初めてではあるまい。それは「アーティストの部屋」だった。彼は人生をしっかりと引き受けているようだった。そして、明日を見つめるような目をしていて。「彼は良い環境にいるのだろう」とわたしは思い、それをうちに持ち帰った。

良い体験をさせてもらいました。

曾布川祐

.....



studio COOCA

平塚にある「studio COOCA (スタジオクーカ)」を訪問した。

福祉施設(生活介護・就労継続支援B型・共同生活援助)であり、創作した作品を社会に発信するアトリエ。ここに通う利用者たちは、“アーティスト”と呼ばれる。クーカでは、主に絵画などの創作活動を行っている。1階のギャラリースペースには、オンリーワンの雑貨や小物、食器が並ぶ。ルームフレグランスなど、企業とコラボした商品も目立つ。奥には広い作業スペース。アーティストたちは、それぞれがそれぞれの方法で創作活動をしていた。

2階には事務所と、ダンススタジオのようなスペースがあった。ドラムセットやピアノも置かれている。クーカには曜日ごとの活動予定があって、ここはヨガや音楽活動をする際に使われるそう。他にも陶芸や農業など。これらは自由参加であり、創作活動を豊かにするための手助的な役割

を果たす。

3階はアーティストたちのアトリエと、作品を保管する倉庫。余白をもって複数設置された作業台の上は、それぞれのアーティストの特色が出ている。静かに過ごしたいひと向けの個室もあった。綺麗すぎず、雑多過ぎず、ほどよくゴチャっとした感じ。

施設長の関根祥平さんにお話を伺う。支援計画書については、A4用紙一枚にごく質素にまとめている。ライセンス契約や商品管理などもあるので、事務仕事はやむを得ないが、直接支援の時間を多くとりたので実務系はできるだけ簡単にしていきたい、と関根さんは言う。支援に関わるMTGは火曜日と金曜日の2回と毎朝の全体スケジュール確認が主。(それ以外の曜日は、問題に応じてその都度実施する。)[支援を考えること]はつまり「いかに彼らの創作の幅を広げるか」であり、いかに「作品を人に見てもらおうか」なので、そこに注力しているようだった。作品を観た人が何を感じるかは、その人の感性に委ねる。

アーティストたちは喜々として、来訪した我々に「これどうぞ!」と名刺(本人の手作り)を配ったり、自分の作品を見せてくれた。見学者には慣れているのだろうし、仕事としてもものづくりをしている、という自覚があるひとが多いように思った。と、同時に、“なにもつくらないひと”も存在している。「創作活動」や「仕事」という言葉は、あえて世間一般に分かりやすいように使っている。本当は何もしなくてもいい。「そこにいることも仕事」であるが、しかしそうすると彼らの居場所を確保することが難しい。彼らの“何もせず、ただそこにいること”の権利を担保するために、絵画などの創作物を販売したり、デザインの仕事を請け負っている面もある。クーカでは、あくまでも作品が売れることではなく、それを通して彼らが社会と繋がることを目指している。

レッツの取り組みと根幹は同じだと思った。それを外へ伝えようとするとき、クーカでは“作品”という媒体を通す。ビジュアルから発信される情報のインパクトは大きい。派手な作品を見て、誤解もされる。クーカでは最近、平塚競輪場の壁面アートを手掛けたという。こんなところにこんな絵を描けるアーティストや組織はすごい、という受け取り方ももちろんあるだろう。関根さんは、別にそれはそれでいい、と軽やかに言う。とにかく知ってもらい、繋がれるきっかけを作ること。スタッフや他の利用者たちとの、人とひととの関わりの中で作品が生まれ、作品によって外のひとと繋がる。それが、相互の生活を豊かにすることになっていく。そのために、やらなくてもいいこととやるべきことが、

明瞭になっている。潔いと思った。

塚本千花

.....



ケアコミュニティハウス「ニコちゃん家」

静かな喧騒——ケアコミュニティハウス「ニコちゃん家」を訪れて抱いた印象だ。

私たちが到着した時には、劇団ニコちゃんズの稽古が終盤に差し掛かり、大広間では帰り支度と並行して演劇の稽古が行われていた。モリス・センダックの絵本の朗読があり、怪獣を演じてゆっくりと回転する電動車いすに乗った青年二人。すぐ側では、移乗のために揺れる車椅子の音、支える人の息遣い。呼吸器や吸引器の電子音。キッチンの洗い物の音。同時多発的に出来事が起こる。そこに時折、19歳の女性が鳴らす鈴の音がこれ以上ないほどにはっきりと響く。鈴の音は劇における彼女の発話なのだ。

ひっそりと静かで、ほんのりと明るく、足元からあたたかい空間——仰向けで過ごす重症心身障害のある人にとって刺激とならないように、照明は天井に向けられて間接照明となっている。体温調節が難しい人が快適に過ごすことができるように、床は場所によって温度調整ができる。重い病気や障害のある人が、命を脅かされずに過ごすことができる工夫がなされている——には、しかし同時に、前述したような生活の音がそこかしこでさわさわと響いていて、賑やかな活気が感じられた。短い滞在ではあったが、様々な発信媒体を通じて伝わってくるニコちゃんの会のエネルギーの根幹に触れるようで感動的な時間だった。

2012年に発足した認定NPO法人ニコちゃんの会の活動は実に多岐にわたっている。「身体的にバラエティあふれるひとたちの演劇公演」等のすっごい演劇アートプロジェクト、啓発のための研修や講座、展示イベント、制度や仕組みづくりのための調査研究、オーロラを観たいという青年の夢から始まった海外渡航プロジェクト「たかしとオーロラいくっ隊」等々。日々の生活に関わる福祉サービスとして、居宅介護、重度訪問介護等の暮らしの場に訪問する支援。児童発達支援、居宅訪問型児童発達支援、放課後等デイサービス、生活介護等の通所の支援。特定相談支援、障がい児相談支援等の相談支援を行う。

ケアコミュニティハウス「ニコちゃん家」は、支え合い(ケア)が当た

り前にあるコミュニティをつくる開かれた拠点として、会の設立以前より10年以上の構想や準備を経て、2023年7月に開設された。通所の福祉サービスと事務所の機能があり、同時に多様な人が行き交う場となるように、これから色々なきっかけづくりをしていくのだという。

ニコちゃん家の通所のモットーは「さぁ今日は何する?!」だと、代表理事の森山淳子さんは教えてくれた。その日の体調によって、できることもやりたいことも変わる。眠たいときは無理せずのんびりとすることもあるし、何人かで連れ立って散歩に出かけることもある。ケアする側が立てた予定やプログラムが先立つのではなく、その時々的心身の状態から本人が自分自身のことを決める、関わる側もそれを大切にしているのだと思った。個別支援計画書は、法定上必要な内容を記入するのはもちろんだが、あえて作り込むことはしていないという。個別支援計画書の項目は「生活」と「健康」に分かれていて、表現活動に関するものは「生活」の欄に書かれる。スタッフの福田万由未さんと「個別支援計画書の〈支援目標〉は本人を主語にして書くのか?それともケアするスタッフを主語にするのか?」という話になった。ニコちゃんの会では——そして、私たちも——、支援目標はケアするスタッフを主語にして関わる時の指針や目指すものを書いている。しかし、福田さんがある研修で「ここは本人を主語に書くもの」と聞いて、改めなくてはならないのだろうかと思っていたのだそう。本書収録のレッツ・夏目によるまとめでも述べられている通り、障害者総合支援法の条項では支援目標は福祉サービスの目標だと読めるのだが、異なる理解が研修や記載例によって広まっているように思う。それにしても、日々の生活で即興的に紡ぎ出されるケアの関係性において、目標を設定して達成を図るということはどういうことなのだろうという思いを新たにした。

最後に、ニコちゃんの会が開発したウェブアプリ「じぶんノート」について記しておきたい。じぶんノートの用途は主に二つある。一つは、病気や障害のある人やその家族が本人に関わる人とともに日常的に情報共有を行うこと。食事や水分量、排泄、服薬のこと、体調等一人ひとりの必要に応じてカスタマイズできる項目があり、本人や家族、通学・通勤先やケア、医療、看護等本人に関わる人たちが相互的に共有して日々のノートに書き込んでいくことができる。もう一つが、緊急災害時の救助となること。名前、コミュニケーションの方法、服薬情報といった自分自身の基本的で大切な情報へのリンクを二次元バーコードで出力できる「たすけてQR」という機能がある。これを重い病気や障害のある人が身につけておくことで、本人が自分のことを人に伝えたり説明することができない状況

に陥った時にも代わりに伝えることができる。実際にニコちゃんの会が関わっている人たちの多くは、このじぶんノートを所属の異なる複数の関係者と共有しながら、日々の生活において活用している。ここで強調しておきたいのは、じぶんノートは、本人自身の一部であり財産であって、支援する側が所有するのではないということだ。じぶんノートは本人に関わる人が変わっていても——支援するこの私もう関わることがなくなっても、災害によって本人が一人になることがあっても——、自分が自分であることを保障して助ける。このようなじぶんノートに込められた考え方は、私たちがいま考えようとしている「計画」や「記録」に対しても大きな問いを投げかけているように思う。

ササキユーイチ

.....



工房まる

「工房まる」は1997年、福岡市で無認可の福祉作業所として始まった。2007年に運営母体をNPO法人化したのちに、事業を法定サービスに移行。現在は野間、日佐、田村の三ヶ所にあるアトリエにて障害のある約50名のメンバーが絵画・陶芸・木工等の創作を中心に活動する。障害者総合支援法による障害福祉サービスとして生活介護と就労継続支援B型を行っている。

工房まる・主任支援員の池永健介さんに日佐と野間のアトリエを順に案内していただいた。アトリエではメンバーのみなさんがそれぞれのスペースで制作をしている。日の当たる縁側に座ってドロイングをする柳田さん。木の板に自分で水張りした画用紙に水彩絵の具を大胆に塗っている仁井さん。山田さんは筆をとめて自身の作品やポートフォリオを紹介してくれた。池永さんとメンバーとの掛け合いの様子に親近感を抱いた。メンバーがつくる作品の形には必然があると、池永さんは話す。本人の持ち味や生活の習慣が作品の形に現れている。工房まるでは、その必然を大切にしながら作品を元にしたオリジナルグッズの制作販売や、企業や店舗とのコラボ企画・イラスト起用等をメンバーとともにやっている。

工房まるの個別支援計画書は「生活（学ぶ・参加する・遊ぶ）」、「仕事（表現・創作・働く）」、「ケア」の三つの項目に分かれている。書式には特徴的なところが二つあると思った。一つは、支援目標を記す欄の名前が「目標／テーマ」とされていること。テーマという言葉が添えられてい

ることで、目標という語が暗に与える目的的事であることを強いる印象や寄り道することを許さないような印象がほぐされている。こういった改変は、メンバーに説明する場面やメンバー自身が内容を読むことを念頭において書類が書かれていることにも関係しているように思う。もう一つは、それぞれの項目の支援目標の手前に「手がかり／キーワード」という欄があること。ここには支援目標を立てるにあたっての参考や根拠となるように、日々の関わりやアセスメントのなかで見出された本人の特徴や性格、好きなもの、生活環境といったことが書かれる。計画の立案にあたってスタッフごとにスキルや感覚に違いがあるという課題意識からつくられたものだという。また、同様の課題から工房まるではメンバーのアセスメントを元に「アセスメント整理表」というツールを使って計画作成の参考にしている。アセスメント整理表は、七つの項目（①ストレングス、②本人の思い・主訴、③現状、④2と3のズレ（差）、⑤ズレ（差）を満たすために必要なこと、⑥長期目標、⑦優先順位）を順に埋めていくことで、支援目標が自ずと導き出せるようにつくられている。他方で、計画の立案よりも大切だと考えているのは、どのように半年や一年を過ごしてきたのかという本人の歩みや過程を確認すること。そして、これからどんなことをテーマに過ごしていきたいのかということに本人と関わる人たちが思いを馳せることだという。その意味で個別支援計画書はそのきっかけづくりにすぎないのかもしれない。

アトリエを案内いただくなかで池永さんが言われた言葉が印象に残る。長く酒器を制作していたメンバーがスタッフからの提案でコーヒーカップづくりに取り組むことになった。その過程で関わる現場スタッフと池永さんとメンバー自身と、もっと成形方法や形・色を探求したらよいのではとか、本人がやりたくてやっているのだからいいだろうとか、当の本人はわりと何でもよかったりとか、いろいろな思いのずれがありながらやりとりをして進めたことがあったのだという。同じものやことに対しても、個々の見方にはずれがある。「でも、ずれがあることは集団やコミュニティの豊かさだと思う」と、池永さんは言う。

ずれがあることの豊かさ。ところで、工房まるの設立目的には〈「その人らしさ」が表れてくることを「自立」〉と捉えるという考え方が書かれている。施設長の吉田修一さんはこのことについて次のように話す。

「その人らしさというものは、相手があって初めて見えてくること。様々な人との関わりによって、その人らしさはより立体的に豊かに見えてくるのではないか。関わりによって本人のコミュニティが広がって、私たちが知らないその人らしさや、暮らしや生き方が広がっていくとよいと思う。」

個別支援計画書において重要なのは書類や立案自体の形ではなく、それをつくる過程なのではないだろうか。その過程において、本人や関わる人たち同士のずれ＝豊かさを味わいながら、本人のことをいろんな人が考える機会になるように活用すべきものなのだろうと思った。

ササキユーイチ

.....



リベルテ

2月末、長野県上田市にあるNPO法人リベルテを訪問した。上田駅からリベルテへ向かう道のりには年代を感じさせる趣きのある建物や、マニアックな古着屋さんや新旧のお洒落な喫茶店等々が入り混じり、ここをアルス・ノヴァのメンバーと散歩したら楽しいだろうなと思いつきながら歩いた。

一番先に向かった新しい拠点「-ton- 屯」（事業所名「1の人100の言葉1000の時間」／就労継続支援B型、生活介護）では、職員とメンバーと一緒に明日の食事の下ごしらえに取り組んでいた。ここでみんなの昼食を作るのだという。今後は皆からリクエストを取ったりしたいと、活気が感じられた。地域の人も利用する食堂にと綺麗に改装された店内には、リベルテのメンバーが制作したグッズや絵画が丁寧に飾られ、販売されている。こうすることが、外部の人に活動を知ってもらうのももちろんのこと、制作者のやる気を応援することにも繋がっている。お話を伺いながら強く感じたのはこの「繋がり」である。かといって、「繋がる」ことだけを目的に動いているわけではなく、支援や地域、これは面白そうだ！が混ざった結果、グラデーションのように外とつながっているのだ。

その後も丸堀（生活介護）、roji（自立訓練、特定相談支援）、新棟（就労継続支援B型）と、それぞれの施設をじっくり見学し、職員さんやメンバーさんとお話させていただいた。施設として使っている一軒家の中は細かく緩やかに仕切られていて、同じ空間に居ながらも、それぞれが好きな場所で作業していた。懐かしい雰囲気の間や机、スツとお茶を淹れてくださる職員さん、ついつい長居してしまった。

どの施設にも外と繋がる場所（庭、食堂、ショップ）やイベントがあり、それが日常になっていた。その日常は雇用にも影響していて、ある職員さんはリベルテのイベント時にたまたま前を通り、求人の掲示を見てふらりと立ち寄ったのがきっかけで今も働いている。ある職員さんは利用者さん（詩人）主催の詩の会に参加し、ファンになった事がきっかけである。

夜は「メンバーの視点に降り立つ会」に参加させていただいた。不定

期で行われていて今回で3回目。ケース会議とは違い、みんなでざっくばらんに話すことでメンバーさんの像を更新し、共有することが目的。夜の会で、お子さんも一緒に過ごす中、パートさんも参加し、新しい支援方法の提案や、次は誰の会？など、皆さん意欲的に参加されていた。棟や曜日が違うとなかなか顔を合わせない利用者さんが居たり、他の職員さんがどう関わっているのかよく知らなかったりと、毎日の数時間のzoomミーティングだけでは共有しきれないことが沢山ある。これはアルス・ノヴァにも共通する課題だ。

次の日の朝、リベルテから徒歩10分ほどの商店街にあるシアター＆ゲストハウス「犀の角」の荒井舞さんに犀の角の歴史と思いと共に、「のきした」とその活動についても詳しく伺うことができた。「のきした」は上田市でコロナ禍をきっかけに立ち上がったソーシャルコミュニティで、リベルテ、犀の角、NPO法人場作りネット、上田映劇などの団体の他に、地域の住人が個人で数名参加している。有志で集まるこのグループにはトップが居ない。企画を考えたり、声を上げた人がその時の「首脳」となってグループを動かしていくそうだ。そして、場作りネットや犀の角のスタッフがリベルテで働いたりすることがあるらしい。それぞれ団体の間を人が行き来することで、自然と共同作業が立ち上がる土壌ができています。

午後はリベルテの代表の武捨さんの計らいで、アーツコミッション・ヨコハマの視察に少し合流させていただいた。おすすめの食事処にそれぞれ数名に分かれて昼食をとりに行った。私が同行したチームは「ニュービーナス」という昔ながらの喫茶店で昼食を食べた。600円でボリュームたっぷりの美味しいナポリタンが食べられるお店だ。一緒になった場作りネットのソーシャルワーカーの秋山さんから「ニュービーナス」の店主夫妻が度々犀の角のカフェを利用していることや、やどかりハウス（女性や母子がワンコインで一時宿泊や生活の相談ができる）の活動を理解して、利用する女性に優しく接して下さること、コロナ禍に顕著になった上田市の住人の連携にまつわるエピソードなどを聞いた。

リベルテで個別支援計画を作る時に活用しているソフトを紹介して下さり、使うのであれば説明しに行くよとまで言い、数人のスタッフと共に美味しいおもてなしの会を開き、アーツコミッション・ヨコハマにまで繋げて下さった武捨さん。地域と福祉をつなげる要はやはり「人」ですね。

尾張美途

.....



ハーモニー

今回は「支援計画」の相談で伺ったが、フォーマットでは到底わからない積層されたケアの現場と空間があった。

まず、驚いたのは施設案内を利用者さんがしてくれることだ。利用人数やハーモニーの特徴などを原稿を見ながら丁寧に教えてくれる。目玉は毎週水曜日に開催される「愛のミーティング」、そしてBARカウンターのような食堂で出来上がる300円の栄養満点のランチということだった。よそで就労している利用者も多くランチを食べてミーティングに出お互いの近況を確認して帰る、そんな人が多いらしい。

日中に決まったプログラムはなく、働きたい人は清掃や広報などの活動があり、のんびり過ごしたい人は居場所として利用している。新澤さんは「利用者さん自身も『働かねば』という社会の価値観にとらわれている場合もある、そこを外して安心して過ごす環境づくりをしているんだ」とおっしゃっていた。またあえて事務室を作らないことで、スタッフ、利用者が混在しているのも特徴だ。そこは少しレッツと似ている。

15年にわたる施設運営の中で培われた支援計画自体はシンプルだ。ハーモニーは精神障害の利用者が多いので、相談支援事業所からきた内容をアレンジし、利用者本人と共有できる形にして都度更新する。ただ事務室がないため、個人情報や日々の記録は福祉ソフトを導入しオンライン上でスタッフが共有できるように工夫している。それを抽出しまとめたものが個別支援計画になるのだが、このオンライン上の共有はまだ実験段階ということだ。

ハーモニーの目玉、毎週水曜日に開催される「愛のミーティング」。私たちが今回初めて参加させていただいた。利用者たちの近況や苦労、雑談を話し合う場なのだが、リモートで寝転びながらタバコをふかし参加している利用者さんや、外部参加者もいる。新澤さんが、議題に入ると、なんといきなり亡くなった利用者ご夫婦の「葬儀」の話から始まり、私はびっくりしてしまった。どうしてもセンシティブな話題は利用者さんが傷つくから避けようとするのが福祉の一般的な対応だと思っていたのだが、（もちろんこのミーティングは事前に利用者に議題を伝えて出たくない方は参加しないという選択が取れるよう配慮がしてある）。利用者さんたちは、淡々と感想や思いを話していく。時折、亡くなったご夫婦が残した大量の激辛カラムーチョが残って大変！なんて冗談も飛び交う。私たちもその激辛カラムーチョの余りをいただくことになり、なんだか不思議な思いでその袋を浜松に持ち帰ってレッツみんなで食べた。

どうしてあんな、信頼関係（利用者の田中さんはチーム力とおっしゃっていた）が生まれるのだろう。新澤さんは、当初行なっていた個別相談の限界を指摘されていた。毎日ひっきりなしにかかる電話に應對し、ひとりひとり個別で対応しても、解決しなかったり、逆にこじれてしまうケースがあったという。そこであえて集団の場に共有し、お互いが安心して話せる環境づくりを15年かけて培ってきたのだ。

そして新澤さんはこのミーティングには「他者」の存在が必要だとおっしゃっていた。確かにその日は実習生の大学生や私たちのような見学者もミーティングに参加した。こうした外部からの目線や意見が入ることが、ミーティングが閉鎖的にならない理由なのだろう。利用者さん自身も、どこまで自分を開示できるか、どんな話題ならあげていいか、をミーティングの中で覚え、「チーム力」を培ってきたようだ。確かに、ミーティングは基本的にはひとりひとりの話題は短い。同じことを繰り返す話す方には、「その話題長いつて！」なんて他の方からチャチャが入る。話題は重くともなんだかとても軽やかなミーティングなのだ。それは傾聴に重きを置くレッツの「哲学カフェ」とは違う対話のあり方だと感じた。

レッツは重度の知的障害がある方の存在を社会に顕在化することに関心を入れている。言ってしまうと、フルオープン。たけし文化センターに来る人には、彼らの日常を全て見ることができる。一方、ハーモニーは開いているが、完全には開かない。だからこそ、愛のミーティングやその対話の中から生まれた「幻聴妄想かるた」など時間や経験、言葉が積み重なった表現が生まれているのかもしれない。そこには安心できる居場所と利用者さんが主体となり作り上げてきたチーム力があつた。今度東京に行った時は、フラッと立ち寄り、みなさんと300円のランチを食べようと思った。

久保田瑛

.....



青木彬さんの話を 聞いてみた

column

福祉×アート

明確な答えがあるよりも、わからなさに直面することの方が多し支援の現場のなかで、個別支援計画書という、明確な表現で支援のあり方を固定化せざるを得ない法定書類を記すという矛盾をどうしたらいいのか。

いっぽうで、明確でないものや、わからないことを得意とするのがアートだ。レッツがアートに信頼を置いているのはまさにその「わからなさ」に対する実直な姿勢にある。わからないと投げ出したり、無理やり整理するのではなく、向き合ったり楽しんだりする姿勢だ。

そこで、2023年12月12日、キュレーターとして以前から福祉とアートの間に立って活動してきた青木彬さんにお話を伺った。当日はご自身が以前から調査研究されてきたセツルメント運動とアートの話を中心に、地域福祉や介護実習での気付きなどさまざまなお話を伺った。

ここでは青木彬さんのお話をを受けてスタッフが寄せた感想を紹介する。

※青木彬さんのプロフィールは #7『「表現未満、」を話す、聞く』に掲載しています。



佐藤啓太

貧困層の住む生活地域に入り生活を共にし、彼らの生活の向上や地域課題の解決に取り組んだセツルメント運動の歴史と現在、そして青木さんの取り組みが同じ地続きにあることに大変感心した。場を共にし、こうかなあかな、と考へ行動する姿はここアルス・ノヴァでも日々取り組まれており、これらの活動を如何に社会に発信し共有するか、また共有するうえでの課題を如何にユーモラスに真剣に超えてゆくかが今もこれからもあるのかな、と感じた。特に2023年現在は、形式めいた状態になっている支援計画書に、生々しくそして体温を持った支援現場の、こうかなあかな、という取り組みを反映し主に福祉関係者に響く発信ができないか、と考へている状態だ。

僕は以前、監査対象の公的な書類である支援計画書は極めて事務的に作成し、福祉事業を滞り無く運営し、その他の場や表現によって「アルス・ノヴァらしい支援の姿の発表」をすれば良い、と考へていた。昨日の青木さんの話を受けた今現在でもそう思っもいる。

一方、確かに支援計画書に、生々しくそして体温を持った支援現場の、こうかなあかな、という取り組みを反映することができたら如何様なる景色が見えるのか!?ということにも興味関心が高まっもいる。他事業所の支援現場、特にアートや表現活動を大切にしている支援現場の視察と支援計画書の作成の状況をリサーチし、今ある形式めいた支援計画書の状態を変えてもみたい。

何故ここにやここにやと未だに「このままでいいだろうし、変えてっもいいだろう」と考へているのだろうか私は、と思っのか。それは、支援現場で起こっている様々なことが文章化できるのか?書類に落とし込めるのか?という疑問からなのだろう。

画家のジャクソン・ポロックや絵本作家のかこさとしをインスパイアしたのはセツルメント運動の現場で共にした人々との関わりや場のゆるやかなチカラからだったのではないだろうか。それら心理的作用は極めて動的でありひとつひとつの相互作用は瞬く間に広がったと推測できる。同様の姿はアルス・ノヴァにも在る。場を共にし巡り合っ人同士(利用者、スタッフ、来訪者)が即興的に絡み合い繰り広げられるアルス・ノヴァの景色はスタッフ一人称の文章だけでなく、その場全体を収めた俯瞰的視点の記録として動画撮影での記録保存と検証、発信が適格ではないだろうか。

利用者本人を中心とした多角的な支援の姿や、パニックを伴う利用者

同士の連鎖はスタッフと利用者との関係性の深さが相まっっており、文章化だけでなく図や絵で表現したほうが適格ではないだろうか。青木さんが松沢病院での池づくりのエピソードや大切にしている豚が売られていくエピソードに関心を持っしたのは、病院スタッフさんがパネル展示をし、語らいを重ねて青木さんに熱心に伝えたからだろう。その姿そのものがまさに表現行為であり、ユーモラスかつ真剣であっただろうと推測できる。

幾重にもある表現方法(動画、展示、語らい、支援計画書)でアルス・ノヴァの景色や哲学、人と人との関係、人間そのものの姿が伝えられたら、と感じた。

.....



内田翔太郎

他人に職業を尋ねられたときに「福祉施設で働いています」と答えると、大抵の人から「大変な仕事ですね」とか「立派ですね」といった反応が返っくる。

そう言われると私はいつも少し困っ顔で「ありがとうございます」なんてモゴモゴと言ったりする。福祉の仕事は確かに大変なこともあるが、面白いことだったくさんある。しかし世間には福祉の仕事は大変というイメージが先行してっ、面白さの部分があまり伝わっないことにいつも若干のもどかしさを感じている。

今回の青木さんの話を聞いて一番印象的だっしたのは、青木さんがとても楽しそうに福祉の話をしてっことだ。福祉施設実習の話をあんなに楽しそうにしている人を私は見たことがない。きっどんな人でも青木さんの話を聞けば今よりもっと福祉のことをポジティブに捉えられるのではないかと思っ。自身の障害について、こちらがどんな顔で聞けばいいのか戸惑っってしまうくらいに、明るく、障害を面白がるような語りをしてっ。自身の切断した足の骨を顔料にして義足を作品化する話は、こちらの感情と情報の処理が間に合わなくて脳がエラーを起こしそうだっ。おそらく障害を受容するまでの過程は相当大変なものがあったと想像するが、こちらがそれほどシリアスになりすぎず話を聞けたのは青木さんが持つ物事を受容・肯定する強さがあっからではないかと思っている。

青木さんは実習中に利用者の話をじっくり聞いて、その人が大切にしていることを知ろうとしたという話をしてっ。私はこの話をとても共感しなが

ら聞いていた。他者を理解するには、その人が歩んできた人生の歩みを知る必要があり、同時にその話を聞くときの姿勢は自身の価値観や常識に捉われず、相手を肯定することが大切だ。自分にとっては何の価値もないことでも、他人にとっては生きる上でとても大切にしていることだってある。私はアートについては門外漢だが、キュレーターとしての経験が、相手を受容しつつ肯定する福祉的なアプローチと繋がっているのかもしれないな、と思った。

セツルメントの話も大変興味深かった。私が特に高い関心を持ったのは興望館の過去の活動の記録を元に作ったアート作品だった。長い歴史があり何世代にも渡って利用され続けてきた興望館の古い活動の記録を、今を生きる人たちによって温もりが感じられる刺繍によって作品化することで、過去と現在が重なって一つになるような不思議な感覚があった。記録は業務上必要だから作成するといった側面が強く、とすれば事務作業になりがちだ。しかしそれをアート作品にすることで、活動の記録はただの記録ではなく文字と文字の行間に何かがあると感じさせ、記録が持つ記録以外の価値の可能性を感じた。

私は以前、精神科病院で働いていたことがあった。その病院でカルテが電子化されたのは私が勤め始める10年前からなので、年金申請などで10年以上前の記録を参照するときは、紙カルテの保管庫まで行ってかつて使われていた紙カルテを引っ張り出してくる必要があった。私はその紙カルテを読むのが好きだった。紙カルテには電子カルテにはない記述者ごとに違う筆跡、色褪せた古い紙、添付された古い写真など、温もりというよりも生々しい質感があった。内容自体も現在は落ち着いた印象の男性が、昔は荒々しい性格だったことなど、人生の様々な変遷がそこから読み取れた。精神科病院は入院歴が長い人も多いため、カルテの記録は膨大なものになる。思えば、個人について客観的に継続した記録が残り続けるというのは稀なことであり、日常生活ではありえないことだ。しかしそれが医療や福祉では日常であり常識だ。カルテの情報は重要な個人情報なのでその記録は基本的には支援外の目的で活用されるべきでないし、外部に出すことなどをもってのほかである。ただ記録が保管されその人が生きた証が形になって残り続けることは、素直に素敵なことなのではないかと感じた。

青木さんは自身のアート活動や福祉実習の話など幅広い話題について話をされていたが、私はそれらを聞きながら裏にあるテーマは「歴史」な

のではないかと考えていた。利用者の話をじっくり聞くことは個人史を共に作り上げていくことともいえるし、セツルメントは社会福祉史の出発点とも言える。

私は常々「知る」ということは「好き」になることだと思っている。人でも街でもあらゆる物事で、知らないものを好きになるのは難しい。逆に知りさえすれば対象について興味を持ち、気づいたら好きになっていたということはよくある。歴史とは「知る」ことの積み重ねだ。そして「好き」は行動の原動力になる。青木さん自身の興味関心から福祉の世界に飛び込んだり、施設や病院のリサーチを進める姿勢から特にそのことを強く感じた。

福祉施設や病院は、歴史が重なれば重なるほど、その場所独自の文化が生まれるように思う。しかしその歴史が外に出ることは少ない。それはきっとその文化の価値を客観的に評価する他者がいないことと、福祉施設や病院がそもそも抱えている閉鎖性や社会のタブー視が原因であると推測する。それこそ都立松沢病院のようなメジャーな病院・施設やハンセン病療養所のような特殊なケースでない、施設の歴史が外部化することはほとんどないのではないだろうか。

都立松沢病院の庭作りの話を聞いて思い出したのだが、以前私が勤めていた病院にも病院独自の文化があった。私がよく古い患者さんから聞いたのは「ガイサ」の話だった。ガイサとは院外作業の略で、院外作業というのはまだ作業療法が制度化される以前、昼間に患者さんが病院周辺の工場などに出掛けて行って就労する活動のことだ。今でいうとA型作業所の施設外就労を病院が行うといった感じだろうか。閉鎖病棟に入院していると外で買い物も出来ないため、ガイサの賃金は溜まる一方で中には数百万も貯金が出来た人もいたらしい。そこで年に何回か病院側が慰安旅行を企画して患者さんと泊まりで温泉旅行に行くのだが、そこでは普段は厳しい看護師さんも患者さんと一緒になって酒を飲んで楽しんだという。今では患者と一緒に看護師が酒を飲むなんて考えられないことだ。もうそれも何十年も前の話なのだが、その話をする人はつい最近の楽しかった出来事のようにガイサの話を私にしてくれた。他にも色々な昔のエピソードを聞いたが、どの話も牧歌的で今とは全く違う世界の話のように聞こえた。きっと私が勤めていた病院や都立松沢病院の他にも、施設の数だけ独自の文化が育まれていったのだと思う。

ガイサは私が勤め始めた頃にはすでに行われていなかった。はっきりとしたことはわからないが、おそらく作業療法が制度化されたことでガイサ

の必要性がなくなったことと、ガイサの入院患者に対する使役性などが問題になったのではないかと思う。

都立松沢病院の庭作りや、精神科病院のガイサ、社会保障の先駆けともいえるセツルメント運動、これらに共通するのは福祉が制度化する以前のプリミティブな福祉活動であるということだ。福祉制度は現代に近づくにつれて制度が発達し、より多くの人に使いやすくなるように発展してきた。しかしその流れの中で取りこぼしてきたものもあることに青木さんの話を聞いて気付かされた。もちろん制度が未発達だった頃のことを懐古的に全て肯定するわけではない。精神科領域だけ見ても人権が軽視された結果、様々な問題が起こり、その都度異議申し立てがなされ、少しずつ状況が改善され現代に至っている。ただ、過去を振り返ることは、サービスが制度化したことによる弊害に目を向けるアプローチになり得るのではないだろうか。サービス制度化の進展は、サービスの枠組みに人の生活を当てはめていくことにもなりかねない。生き方の主導権を自分の手に確保しながら、どのようにして生きていくかを考えるヒントはもしかしたら歴史の中にあるのかもしれない。青木さんの過去や背景を知りつつ、今の福祉のあり方を考えていく取り組みはまるでルネッサンスのようで、今後どのような広がりを持っていくのかとても楽しみである。

.....



高木 茜子

もはや芸術の枠内で名付けないことに意味があるんじゃないか。

私が青木さんの話を聞き、沸々と考えていたのは日常のささやかな事象の芸術というものに対する位置付けについてだった。

私は小さい時から家族に連れられ美術館などに行っては、絵画や彫刻を見るのが好きだった。芸術というのは絵画・造形や音楽でいうとクラシックみたいなものだと思っていた。どこか高尚なもので、自分にとっては日常生活からは分離した一個の文化だと。

流れ流れて大学一年生の時に、人づてにいわれる「地域アートプロジェクト」に出会い、運営ボランティアを経験したり全国の様々な芸術祭にでかけては衝撃を受けていた。

その頃鬱々と悩んでいた世に溢れる深刻な社会課題に対して、こんなアプローチがあるんだ!という衝撃である。同時期に奈良の福祉法人た

んぼぼの家で障害者アートとも出会い、従来持っていた福祉施設のアート作品のイメージを覆され、各々が好きなものを好きなように表現できる喜びを自分ごとのように感じたのを覚えている。

しかし、わたしの芸術に対する現在地は変わっている。

あの頃、わたしは芸術に対してある種のハレの要素・祝祭性を強く感じていた。東日本大震災などによって、社会課題や差別は何か特殊な事象なのではなく、社会構造の中に根深く存在し、不可視化されがちだが日常と結びついているということを知り、そこからデモなどの直接的社会運動に身を投じたからこそ、その終わりのなさに、重たいものが日常の中に垂れ込めている感覚に運動に不慣れだったわたしは絶望していた(本当は社会運動は重たく鬱々としたものではなく、日常の中で自らにできる範囲で、時に明るく続けていく、それが可能であるものだと考えを改めたのはかなり後の方である)。

その反動もあり、わたしにとっては各地域での芸術祭で現代アートなどの手法を用いて社会課題を可視化したり、より多くの人に伝えていくアプローチはとても魅力的だった。

しかしそこには日常との連続性という視点が欠けていたのだと思う。既存の社会規範の中では価値付けされにくいけどどうにも気になるものや、作品や形あるものからはこぼれ落ちたがその人を形成するもの、さらにはレッツとの出会いによって「生きることそのものが芸術である」といった感覚が芽生え始めた。

青木さんの話に辿り着くまでえらく長くかかったが、貧困地域などに実際に移り住み、そこで地域生活、文化活動、医療福祉、保育など様々な活動を行うセツルメント運動やそこから地続きな青木さんの活動の話を聞き、よりその感覚が深まった。

セツルメント運動の話を聞き最初にパッと浮かんだのは、日常にもアートの視点を!というような外付けハードディスク的な位置付けだった。しかしよくよく聞くとそういうのとも違う。いわばそれは生活そのものだ。

そして興味深いのは、より社会課題解決型の傾向で目的意識の強いセツルメントほど長続きせず、目の前の人に何ができるかと奔走し続けていたセツルメントは100年余りも続いたという話だ。

生活の中で、頭で考え手を動かし、また考えて、体を動かして…。そこにこそ芸術が宿っているのではないだろうか。それは必ずしもやむにやまれず、表現していないと死ぬ!というような激情である必要はないのだ。日常の中で、ゆうじさんが揺れている、わたしが自炊と格闘している、平

子くんが土の匂いを感じている。日々淡々と、しかし熱意をもって行われている、それが表現、芸術であるところなのはアルス・ノヴァで体感している。

一方で、「ということはもはや名づけ、価値づけをしない方がいいのでは？」という気持ちにもなる。青木さんは冊子『アートによる臨床的価値を考える』にて、アートプロジェクトが行政的な価値観、美学的な観点から評価されることへのモヤモヤを多様な観点から掘り下げており、かつ今回の話の中では「最終的にアートと呼ばない・名付けなくても良いのではないか」と言っていた。

この、言語化しづらい価値をどう表出するか、社会にどう伝えるか、という問題は実に悩ましい。そこの塩梅が青木さんはとても上手い方なのだなぁと思う。福祉と芸術の往復もだが、とても柔軟に、しかし疑問やモヤモヤを持ち続けられる芯があると感じた。どこかに身を置くと、その姿勢は柔らかでなにごとも楽しんでいところがポイントなのだろうか。わたしはつい好戦的になってしまうので難しい…。

言語化しづらい価値—日常の取るに足らないあれこれ、行き交う非言語コミュニケーション。アルス・ノヴァはその宝庫である。それをいかに表に出すのかは、レッツ、アルス・ノヴァの支援計画改革問題にもあるように今現在目下の課題となっている。方法が支援計画なのかという議論は日々行われているものの、合ったフォーマットを見つける、生み出すのが難しいのも事実だ。

行政的な価値観、美学的な価値観、資本主義的な価値観。そういうものはいわば社会のメインストリームに位置している。その価値観と戦っていくには、自らもメインストリームに近づき同じ土俵に立つ必要がある。提案・議論するにも同じ言語を用いなければならない。わかってほしいという気持ちと、同じ土俵に立ってしまったら結局そちらの物語に回収されてしまうのでは？という恐怖がわたしにはある。少々論点はずれるが、レッツはNPOや福祉施設というある種集団として意見が言えるが、これがマイノリティ／個人などになるとどうしても当事者が矢面に立たなければならなくなる。「怒っているとき論理的にものを言わないと、聞いてもらえないよ」と言われてしまう。社会から疎外されてきた側が努力して言葉を尽くさなければ変わらないなんてそんなのおかしいだろう、という気持ちと、どうにかその中に言葉や概念を届けていきたいという両方の思いが障害者福祉だけでなく様々な社会課題に対してある。しかしそこにプリプリしつつもどうにか伝える手法を探っていかなければいけないのだが…。

そうしたモヤモヤを持ちつつも、セツルメントや青木さんのあり方を見

ていると、障害福祉、芸術などの枠組みのなかで名づけようのないものを名づける、価値づける行為の代わりに、少しそこから価値をずらした日々の活動が必要なのだろうか、と感じた。しかしいまだそれが何なのかはわかっていない。

.....



曾布川祐

Settlementの語源は、古英語のsetlan（定住する、定着させる）で、その歴史は比較的浅く、古代ギリシャ語はおろか、ラテン語との繋がりも持っていない（Settlementは入植者の問題を「解決」するために使われた言葉で、16世紀以前には使われた記録がない。言うまでも無く、入植者たちが問題を「解決」どころかより複雑にしたことは後の歴史を知るものならば、誰しもが理解できることだろう）。わたしたちは、こういった時間性の希薄な言葉を使うことには慎重にならなければならない。なぜなら、時間とは潜在性が己を繰り広げるために要した空間の蓄積であると同時に、その蔽われた発生の秘密を埋蔵しているものだからだ。要するに、時間性が希薄であること、それが言語の発生の始原から切り離されていることは、それだけ繰り広げられていないということ、それだけ一時しのぎ的に作られたに過ぎない言語である可能性が高いということだ。そういった言語は、己を存在論的に支える基盤を己自身に持っておらず、他の言語・概念に寄りかかりがちだということは今の世の常だろう。要するに、言葉が己自身の意味のうちに安らうことができず、常にそわそわし、何かに急ぎ立てられるような状態にあるということだ。急ぎ立てられているものは視野が狭くなり、多くのことを見落とすがそれに気付きもしない。要するに、こういった言葉を使うものは、ということだ。

人間の持つ意思的なものの発露についてのさまざまな問題点について自覚していながら、それにもかかわらず相も変わらず意思的な行動性の言語によって語らなければならないということは、すでにそれだけで十分に醜聞である。せめてもの抵抗として、そういった言語活動を通してその言語そのものからの逸脱の道を探らなければ、もはや一言として発することはできまい。これは誠実さの問題だろう。

何かを「うまくやる」こと。それは、潜在性——あるいはより一般的な観点に近づけるならば、歴史性——という見地からは、まったくうまく

っていない。「うまくやる」ことは、潜在性と外在性の間を、それとはまったく別の線引きによって区切り（現実／空想／虚構など）、それによって一時的な解決を目指すものである（「一時的」という言葉を時間性の観点から考えてみよう。そうすると、それは潜在性が己を繰り広げるようになるより以前の時間を指していることが分かる。それは表面的な、あるいは外在性の時間なのだ。要するに、わたしたちは「うまくやる」ことによって、物事を表面的な外在性の彼岸に追いやるのだ）。潜在性は、己の自由を獲得するために事後的な「時間」の中での闘争を強いられることになるのだが、それはそれを勘違いして受け取った代理人によって常に狂わされ、「うまくいかない」ことになってしまう。「歴史」とは、自由を獲得しようとして「うまくいなくなる」潜在性の発露と、それを狂わそうとして「うまくやろうとする」意思的行動の対立によって織りなされるものだとと言える。

潜在性と外在性の関係において誠実たろうとする態度を、わたしたちは「自閉症」と呼んでいるのではないだろうか。しかし、ここでも過度な一般化は避けるべきだ。「自閉症」という言葉は精神医学者による翻訳から生まれていて、それは医学的な見地を反映している。すなわち、そのカテゴリーは医学的な見地から区切られていて、個々の人間が持つ思想的態度にぴったりと合致するような偶然は考え難いということだ。とはいえ、とかく「うまくやること」によってあらゆるものを台無しにしてきた「歴史」を持つわたしたちは、そこからなにがしかを学び取ることに違いない。

「何をどうするのが良いのか」という問いには、意思的なものを過信する傲慢さが反映されている。「何をするか」ではなく、「何をやめるか」「どうやめるか」が意思的なものの問うべき事柄であって、積極性はそこから自ずから生まれるはずだ。要するに、積極性とは意思的なものこのことを言うのではなく、常にすでにそこにある運動のことを言うのである。

何かしらのテーマを設定し、それに応じて行動性をフォーカスしていき、一つの統一されたものとしてのまとまりを作り上げる。キュレーションの仕事とは往々にしてそういったものであり、それは時世の要求に応えるものでもある。しかし、そうでないキュレーションは考えられないだろうか。意思的なものの結果ではなく、そこから漏れてしまうものとしての失敗や脱臼、乖離によって成立するようなキュレーションを。わたしたちは、仕事や業績、完成や達成などの言葉も疑ってかからなければいけない。器

用に立ち回ることから生まれるものは何もなく、単に事態をややこしくするだけだからだ。

しかし、ややこしくなることもまた歓迎する方法があるのではないか…。

.....



渡邊亮介

最近、真綿で首を絞められるようにジリジリと息苦しさが増している。

それは、自分が責任のある立場にあるからなのか？それとも、ただ単純に作業量が増えたのか？はたまた、スタッフや利用者の年齢が上がって健康や状況の変化に翻弄されているからなのか？考えることは増え続け、起こった問題は現状の（国の）福祉システムでは大団円にならない。

それだけではない、自分や周りの環境も変わる。社会に大きな影響を与えるには、さまざまな取り組みが必要だ。その代わりに、それに真剣に取り組めば取り組むほど疲弊していく。

こういった（何になるのかわからない）学校のような宿題もやらなければならない。

真剣になればなるほど、システムは『多様性』を忘れていく。規範やルールが生まれる。そして、それが増え続けている。

『社会を変える』というのはどういうことなのだろうか？

本当は、私は、「支援計画なんていらない」と国に言いたい。自分の人生でさえ数ヶ月先の計画もないのに、人の人生の計画を立てることに大きな違和感がある。傲慢であるとさえ思う（それが、支援のひとつとしても）。彼らは意外と勝手に生きているかもしれない。

しかし、きつとこの国のシステムはそんな簡単に変わらないだろう。だから、そのシステムには従いながら、どんな風に工夫すれば良いかを考える、ということなのだろう。正直、事務的に一番簡単な方法で終わらせれば良いと思ってしまう。

『あるがまま』をお手本のように、尊いもののように、お客さんに語りながら、自分たちは『一般的』なシステムの一部として多くの時間を事務作業に使っている。

普段、観光のお客さんや知り合いに語っている『彼らの自由さ、素晴らしさ』を、自分は実践していない。そんな違和感はいつでもある。私は人の多様性を守ろうとするあまり、自分の多様性を犠牲にしている、そう思うときがある。

実際、私には自分の時間や多様性まで犠牲にして『社会を変えなければ』という使命感はない。仕事に対しての(時間とお金の)等価交換はそれなりにできている、と思う(足りないと言われればそれまでだが)。しかし、『使命感を持ちなさい』という感覚がジリジリと迫ってくる。そうしなければ、ここには居られない、という感覚が。スタッフはただそこにいただけではダメなのだ。そして、共事者でも居られない。

こういうことを『矛盾』と感じる私が、そもそも間違っているのか、とも思う。何にモヤモヤしているのか?何が私にとっての『真綿』なのか?

しかし、青木さんのセツルメントの話を聞いた時、なんだかその大きな存在に希望を感じた。心配なのは、その言葉を今まで聞いたことがなかったことだ。現在の一般的な社会に根付いていないからか。話の中では『ボランティア』や『住み込み』などのワードがでてきた。そういったことが今の時代や日本人の文化にあっていないのかもしれない。なぜ『ボランティア』にならざるを得なかったのか?なぜ衰退してしまったのか?一般の人の心にも届くようにするにはどうすればいいのか?私は、その方法を考えていきたい。

.....



塚本千花

“福祉の本質”とは何だろう。青木彬さんは「無いものの存在」(青木さんが自身のnote上で連載していた記事)の中で、世の中には自分のルールや客観的な事実だけでは割り切れない、当事者にとってのやむを得ない真実がある、と書いている。事例はいくらでも思い浮かぶ。例えば壮さんの自立生活。本人主体の生活を目指し、スーパーの飴コーナーで陳列棚の配置換えをしたいという彼の気持ちに応え続けた結果、力づくでその場から離れなければ気持ちが切り替えられなくなった時期がある。本人(の「お店に行きたい」という想い)を尊重すると掲げておきながら、強制的な退店をしたり、あるいは「行かない」という選択をする支援者の矛盾。

そういう、公にし難い矛盾を抱えて、職員たちは日々悩みながら支援をしている。答えは常に分からない。でも、アートの役割というのは、“分からなさ”に身を置き続けること、つまり自己を更新し続ける手立てだということを、青木さんは言っている。簡単な答えを見つけずに、考え、語り、活用する“想像力”を持ち続けることこそが、ひとが生き延びる技

術であると。無論、「分からなさに佇み続けること」は、気力も体力も使うしたいへんだ。それを可能とするのが障害であり、アートであること。青木さんは、自ら体験した幻肢痛を、「無いものの存在」というアートの思考で掘り下げることによって、人と社会の媒体とした。その主語が福祉となると、主語が大きすぎて色々な物事がこぼれ落ちてしまうように思う。青木さんが、自分自身の身体を通して世界を認識しようとしたように、福祉を自分事として引き寄せるための仕掛け(それはもしかしたら個人に丁寧に焦点を当てていく、という地味な作業なのかもしれない)を生み出すことができたなら、ようやく初めて、福祉の本質というものをひとに伝えるのかもしれない。

.....



